

中間言語研究

日本語学習者による  
指示詞コ・ソ・アの習得

迫田久美子

# 中間言語研究

— 日本語学習者による指示詞コ・ソ・アの習得 —

迫 田 久美子



溪水社

著 者

迫 田 久美子 (さこだ くみこ)

昭和25年生まれ

昭和48年 広島女学院大学文学部卒業

平成8年 広島大学大学院教育学研究科日本語教育学専攻  
博士課程修了、教育学博士、広島大学講師

著書・論文

「保育園2歳児の読みの指導」(共著、『読書科学』昭和57年)

「学生中心の日本語学習指導」(共著、『教育学研究紀要』昭和61年)

「話し言葉におけるコ・ソ・アの中間言語研究」

(『教育学研究紀要』平成5年)ほか。

## 中間言語研究

— 日本語学習者による指示詞コ・ソ・アの習得 —

---

平成9年度文部省助成出版

平成10年2月25日 発行

著 者 迫 田 久 美 子

発行所 株式会社 溪水社

広島市中区小町1-4 (〒730-0041)

電 話 (082) 246-7909

F A X (082) 246-7876

I-NET : <http://www.keisui.co.jp>

E-mail : [info@keisui.co.jp](mailto:info@keisui.co.jp)

---

© SAKODA Kumiko 1998

Printed in JAPAN

ISBN4-87440-497-9 C3081

## はじめに

### 0.1 研究の動機と目的

「日本人の友達が出来ましたか。」

「はい、大学の同じゼミの学生で、Aさんと言う人です。\*あの人と、夏休みに東京へ行きました。」

久しぶりに会った留学生との会話である。この場合、Aさんは筆者とは面識がないので、普通なら「その人」を使うべきであるが「あの人」を使用してしまっている。長年日本語を教えていて、不思議に感じることの1つは指示詞コ・ソ・アの誤用がかなり上級の日本語学習者にも観察されることである。授受表現や敬語も上手に駆使できる留学生の発話にも、ときどきコ・ソ・アの誤用が出現している。指示詞コ・ソ・アは、日本語学習者が入門段階で学習する項目であるはずなのに、なぜ上級の学習者にも依然としてエラーが見られるのだろうか。これが、筆者と指示詞コ・ソ・アの出会いであり、学習者言語に興味を持つきっかけとなった。

日本語学習者は年々増加の傾向を示しており、国内および海外の多くの学習者が様々な目的の下で日本語を学習している。それに伴って、日本語としてあるいは外国語としての日本語教育のブームも高まりを見せ、より多様化した学習者のニーズに対応できる教育が求められている。このような日本語教育の発展の中で日本語学研究や指導法研究のリソースとなったのは、現場日本語教師からの学習者言語の分析、つまり誤用分析であった。言語習得研究の分野では、第二言語学習者とその習得過程で形成する言語を中間言語(interlanguage)と称し、海外では英語を中心とした第二言語習得研究が行われている。形態素の習得順序 (Dulay and Burt, 1973, 1974a, 1974b; Bailey,

Madden and Krashen, 1974; Larsen-Freeman, 1975)、否定構文 (Ravem, 1968; Milton, 1974; Cazden et al., 1975; Wode, 1976; Schumann, 1979) などの文法項目の習得研究から、言語転移 (Taylor, 1975; Zobl, 1984; Sasaki, 1991; Odlin, 1989; Ringbom, 1987, 1992; Heilenman and McDonald, 1994) や教室指導との関係 (Upshur, 1968; Hale and Budar, 1970; Mason, 1971; Perkins and Larsen-Freeman, 1975; Seliger, 1977; Lightbown, 1983, 1984; Ellis, 1984) など、習得に関わる幅広い範囲の研究がなされている。しかし、研究対象となる第二言語の多くは英語であり、インド・ヨーロッパ語以外の言語を対象とした習得研究の数は極めて少ない。日本語の習得研究もまだまだ緒についたばかりであり、広がりの方でも深さの方でも十分とは言えず、英語以外の習得の実証的研究の観点からも、また日本語の指導研究の観点からも日本語に関する多くの第二言語習得研究が望まれるところである。本書は、その一例として指示詞コ・ソ・アの習得に関する実証的研究を提示するものである。

筆者は、本書をまとめるにあたり、方針として次の2点を立てた。

第一点は、中間言語とは何か、中間言語研究ではどんな研究が展開されているのかを示すことである。第二点は、ある文法形態素 (指示詞コ・ソ・ア) を素材として、どのように中間言語研究に取り組んだのかを示すことである。筆者がこの研究を開始した当時は、まだ日本語に関する第二言語習得研究は極めて少なく、調査方法も分析も手探り状態であった。そこで、日本語の習得研究に興味を持つ多くの方々に、筆者の試行錯誤の一例から、学習者の言語とはどんなものなのか、そこから何が分かるのか、どのようにしたら分かるのかのきっかけを掴んでいただきたいと考える。

上記の方針に基づいて、本研究は「指示詞コ・ソ・アの中間言語の形成過程とその要因を明らかにする」という目的を掲げる。つまり、「日本語学習者は指示詞コ・ソ・アをどのように習得していくのか、その要因は何か。」について研究するものである。そこで、本書では研究自体の目的を以下の5点に設定して研究を進めることとする。

- (1) 第一言語と第二言語の習得状況が類似しているのかどうかを明らかにする。
- (2) 中間言語の形成過程（習得過程）を明らかにする。
- (3) 中間言語への言語転移の可能性を明らかにする。
- (4) 学習者共通の誤用の形成要因（原因）を明らかにする。
- (5) 教室指導の中間言語への影響の有無を明らかにする。

## 0.2 研究の方法と構成

本書では、先述した目的を遂行するために、次に挙げる2つを留意点として、研究を進める。

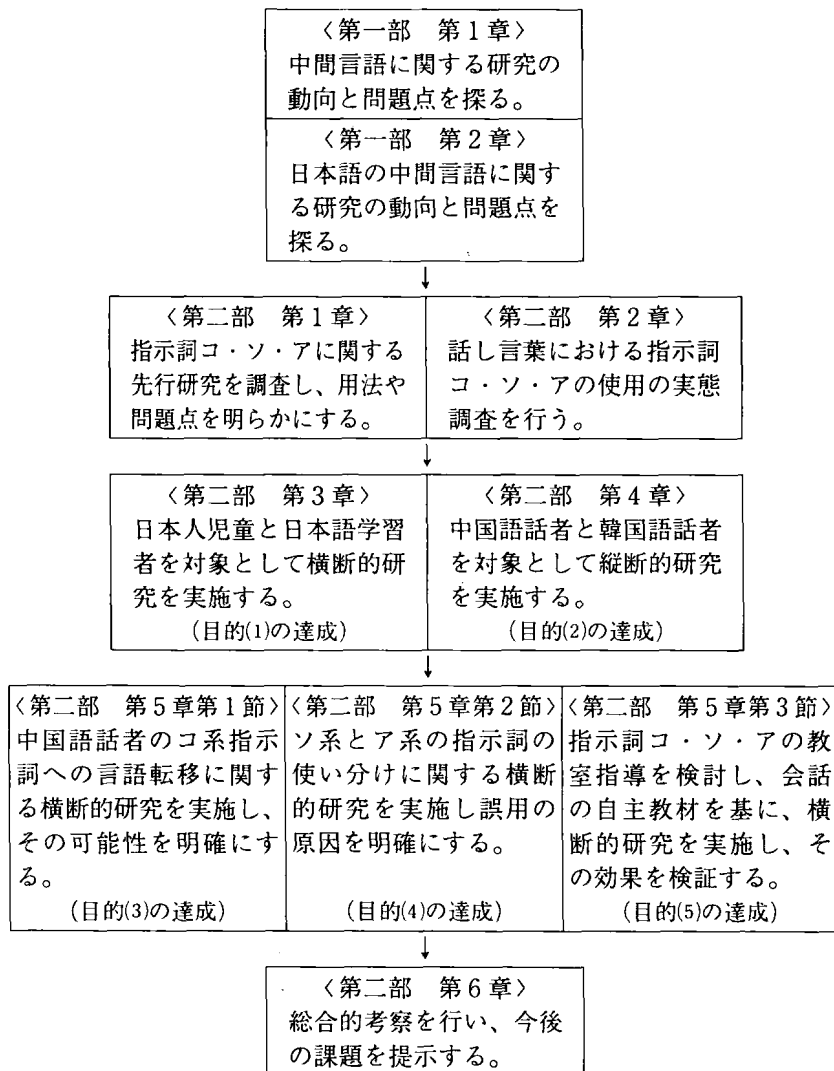
第一点は、方法に関する事柄である。複数の調査方法を取り入れて、多角的な視点からのアプローチを行う。言語習得研究にはその目的や対象に応じて様々な方法があるが、大きく横断的研究（cross-sectional study）と縦断的研究（longitudinal study）に分けられる。横断的研究とは、集団の被験者を対象として、ある特定の時期の一時点における習得現象について研究する方法である。それに対して縦断的研究とは、特定の被験者を対象として、長期間にわたって、ある言語行動の発達過程について研究する方法である（小池（監），1994：18-19）。本書では指示詞コ・ソ・アの中間言語を研究するにあたり、単一の研究方法で行うのではなく、横断的研究と縦断的研究の両者の方法を用いて、多方面からの観察を行うこととする。さらに、それぞれの研究データに対しては、その目的およびデータの内容に応じて統計解析または談話分析の方法を用いて検討する。

第二点は、研究過程に関する事柄である。研究全体を（0.1）に示す4つの段階に分け、それぞれの段階が次の段階の研究の基盤となるような構成を考える。

- (0.1) 第一段階 中間言語研究に関する先行研究  
(事前研究1)
- 中間言語に関するこれまでの動向を探り、問題の所在を明らかにする。また、日本語を第二言語とする中間言語研究の現状を提示する。
- 第二段階 指示詞コ・ソ・アに関する先行研究と目標言語調査  
(事前研究2)
- 指示詞コ・ソ・アに関するこれまでの研究の動向を探り、話し言葉における使用の実態調査を行い、コ・ソ・アの中間言語に関する問題の所在を明らかにする。
- 第三段階 問題に関する横断的研究と縦断的研究の実施  
(調査の実施)
- 第一段階と第二段階で検討した問題点の解明を目的として、横断的研究と縦断的研究を実施し、得られた結果を分析する。
- 第四段階 調査の結果に基づく問題解明への仮説検証  
(結果の検証)
- 第三段階の調査で得られた結果を検討し、指示詞コ・ソ・アの中間言語形成にかかわる問題の解明に向けて、仮説検証を目的として横断的研究を実施する。

以上、方針と研究のプロセスについて述べたが、本書が掲げた目的と上記の各段階および各章のそれぞれの関連がどのようなものであるかを中心に本書の全体構成を図示すると、(0.2) のようになる。

(0.2) 本書の全体構成





以上のような行程を辿って、研究を展開させていく。

本書には5件の横断的研究(調査)と1件の縦断的研究(調査)が含まれている。1件目の横断的研究(目標言語調査)は、その後に展開する2件目の横断的研究と縦断的研究のデータ分類の為の基盤作りである。そして、それらの調査結果は、後に続く横断的研究3件の仮説設定の根拠となっている。従って、本書の特徴の1つは、これらの複数の有機的に繋がりが合った調査に基づいて、課題の検討を行っていることである。そして、もう1つの特徴は、調査資料、発話資料また指導のための自主教材など、多くの資料を掲載していることである。これらの資料が、本書の研究の取り組みと共に、今後の中間言語研究を志す方々の一助になれば幸いである。

# 目 次

## はじめに

- 0.1 研究の動機と目的
- 0.2 研究の方法と構成

## 第一部 中間言語に関する研究の動向

第一章	中間言語研究	3
1.1	中間言語の定義	3
1.2	第一言語と第二言語の習得過程	7
1.3	中間言語における言語転移	12
1.4	教室学習と自然習得	18
第二章	日本語の中間言語研究	26
2.1	誤用分析から中間言語研究への展開	26
2.2	中間言語研究の現状	28
2.2.1	文法項目に関する習得研究	28
2.2.2	特定の母語話者に関する習得研究	34
2.2.3	社会言語学・語用論に関する習得研究	36
2.2.4	第二言語習得理論の実証研究	37
2.3	中間言語研究の資料収集の方法	38
2.4	中間言語研究の問題点	41

## 第二部 指示詞コ・ソ・アに関する中間言語研究

第一章 指示詞コ・ソ・アに関する従来の研究 .....	49
1.1 日本語の指示詞コ・ソ・アの研究 49	
1.1.1 指示詞コ・ソ・アの領域 49	
1.1.2 指示詞コ・ソ・アの用法 55	
1.1.3 指示詞コ・ソ・アの問題点 59	
1.2 韓国語の指示詞と日本語の指示詞 65	
1.3 中国語の指示詞と日本語の指示詞 71	
1.4 日本語の指示詞コ・ソ・アの習得 80	
1.4.1 第一言語の場合 80	
1.4.2 第二言語の場合 84	
第二章 話し言葉における指示詞コ・ソ・アの用法 .....	95
2.1 日本語母語話者の使用調査 95	
2.1.1 目的 95	
2.1.2 方法 95	
2.1.3 結果と考察 96	
2.2 話し言葉における用法の枠組み 99	
2.2.1 用法の提示 99	
2.2.2 用法の枠組みの提示 100	
第三章 日本人児童と日本語学習者における 指示詞コ・ソ・アの習得 .....	104
3.1 日本人児童・日本語学習者の穴埋めテストによる横断的研究 104	
3.1.1 目的 104	
3.1.2 方法 104	
3.1.3 結果と考察 107	

- 3.2 日本人児童・日本語学習者の対話調査による横断的研究 112
  - 3.2.1 目的 112
  - 3.2.2 方法 114
  - 3.2.3 結果と考察 115
- 3.3 日本人児童・日本語学習者の習得に関する類似点と相違点 121

#### 第四章 日本語学習者の指示詞コ・ソ・アの 中間言語の形成過程 ……………129

- 4.1 日本語学習者の対話調査による縦断的研究 129
  - 4.1.1 目的 129
  - 4.1.2 方法 130
  - 4.1.3 結果 133
    - 4.1.3.1 TN (韓国語話者・男性) の場合 133
    - 4.1.3.2 CH (韓国語話者・男性) の場合 137
    - 4.1.3.3 YN (韓国語話者・女性) の場合 139
    - 4.1.3.4 RY (中国語話者・女性) の場合 143
    - 4.1.3.5 SH (中国語話者・女性) の場合 146
    - 4.1.3.6 LL (中国語話者・女性) の場合 149
  - 4.1.4 まとめ 153
- 4.2 指示詞コ・ソ・アの用法の推移 154
- 4.3 指示詞コ・ソ・アの誤用の推移 158
- 4.4 指示詞コ・ソ・アの中間言語の形成過程 165
- 4.5 ソ系とア系指示詞の名詞との結合関係 173

#### 第五章 日本語学習者の指示詞コ・ソ・アの 中間言語形成に関わる要因 ……………183

- 5.1 コ系指示詞への言語転移の可能性 183
  - 5.1.1 コ系指示詞に関する横断的研究 183
    - 5.1.1.1 目的 183
    - 5.1.1.2 方法 185

5.1.1.3	結果	187
5.1.2	コ系指示詞への言語転移	188
5.2	ソ系とア系指示詞の使い分け規則の内在化	190
5.2.1	ソ系とア系指示詞に関する横断的研究	190
5.2.1.1	目的	190
5.2.1.2	方法	193
5.2.1.3	結果	194
5.2.2	ソ系とア系指示詞のパターン形成	196
5.3	指示詞コ・ソ・アの教室指導	200
5.3.1	教科書における指示詞コ・ソ・アの扱いとその問題点	200
5.3.1.1	初級教科書の場合	201
5.3.1.2	中級教科書の場合	206
5.3.2	指示詞コ・ソ・アの用例を含んだ中級教材の作成	212
5.3.3	指示詞コ・ソ・アの教室指導効果に関する横断的研究	214
5.3.3.1	目的	214
5.3.3.2	方法	215
5.3.3.3	結果と考察	215

## 第六章 結 論 .....221

### 6.1 総合的考察 221

6.1.1	日本人児童と日本語学習者の指示詞コ・ソ・アの習得	221
6.1.2	指示詞コ・ソ・アに関する中間言語の形成過程	222
6.1.3	指示詞コ・ソ・アに関する中間言語への言語転移	224
6.1.4	指示詞ソとアの使い分けのパターン形成	226
6.1.5	指示詞コ・ソ・アの教室指導およびその効果	227

### 6.2 今後の課題 228

おわりに .....231

参考文献	233
資料1 第二部第三章～第五章の調査資料	255
1-1 第三章3.1.2の穴埋めテスト (=第五章5.3.3.2のプリテスト)	256
1-2 第三章3.1.3の穴埋めテストの分散分析結果	260
1-3 第三章3.2.3の対話調査における用法別使用頻度と割合	263
1-4 第三章3.2.3の対話調査における系列別使用頻度	267
1-5 第四章4.1.2の縦断的研究の被調査者一覧	277
1-6 第四章4.1.3の縦断的研究の対話調査の系列別使用頻度	279
1-7 第四章4.5の名詞接続の指示詞一覧	285
1-8 第五章5.1.1.2のコ系指示詞に関する正誤判断テスト	293
1-9 第五章5.2.1.2のソ系とア系指示詞の使い分け規則に関する 多肢選択テスト	295
1-10 第五章5.3.3.2のポストテスト	299
資料2 第二部第四章の発話資料 (①期・③期・⑥期)	301
2-1 TN (韓国語話者・男性) の場合	304
2-2 CH (韓国語話者・男性) の場合	325
2-3 YN (韓国語話者・女性) の場合	348
2-4 RY (中国語話者・女性) の場合	376
2-5 SH (中国語話者・女性) の場合	397
2-6 LL (中国語話者・女性) の場合	419
資料3 第二部第五章の指導教材およびタスク資料	445

# 第一部

## 中間言語に関する研究の動向





# 第一章 中間言語研究

## 1.1 中間言語の定義

1950年から60年代、外国語教育の分野では学習者の母語と目標言語の違いを研究することによって学習困難点が克服できると考えられ、対照研究が盛んに行われた。つまり、両言語の違いから、学習者の誤用は予測できると考えられた。しかし、異なった母語の学習者から同様の誤用が観察されたり、母語と目標言語との違いでは予測できない誤用が現れたりしたため、研究の焦点は対照分析から誤用分析へと移っていった。対照分析研究では誤用を排除すべきものとして扱っていたが、誤用分析研究では(1.1)に示すように、学習者が目標言語を学習していく段階での彼らの仮説検証の現れであると考えられた。

(1.1) ... we can regard the making of errors as a device the learner uses in order to learn. It is a way the learner has of testing his hypotheses about the nature of the language he is learning.

(Corder, 1967:167)

そして、様々な学習者の誤用の産出プロセスの研究から、学習者には学習者特有の1つの言語体系が存在すると考えられるようになり、それが中間言語(interlanguage, IL)と称されるようになった。中間言語という用語は、以下の(1.2)に引用したように、Selinker (1969, 1972)によって用いられるようになった。誤用を含む学習者の言語が、目標言語とも母語とも異なっ